

スペイン語圏を知る本（その59）

大泉光一 『伊達政宗の密使：慶長遣欧使節団の隠された使命』
（洋泉社、2010年）

評者 坂東 省次

3月11日、東日本を襲った巨大地震。その後に発生した津波は、東北地方の多くの人々をのみ込み、想像をはるかに超えた爪痕を残していった。

地震と津波のニュースをテレビで見ながら、脳裏をよぎったのは、「サン・ファン・パウティスタ号」のことであった。

東北といえば伊達政宗とその家臣であった支倉常長のことを思い出す。政宗がヨーロッパに派遣した慶長遣欧使節は今からおよそ400年前の1613年10月28日、木造船「サン・ファン・パウティスタ号」で宮城県牡鹿郡月浦を出帆し、一路メキシコを目指した。同年12月にメキシコに到着、そこから常長とスペイン人のフランシスコ修道会師フライ・ルイス・ソテロそれに随員20数名は大西洋を越えてスペインに渡った。翌15年1月30日にはスペイン国王フェリーペ3世に謁見し、通商開設と宣教師派遣を要望する政宗の書翰と協定案を捧呈した。こえて11月3日にはローマで教皇パオロ5世と謁見し、政宗の書状をささげている。

慶長遣欧使節を太平洋を越えて遙かメキシコまで運んだ「サン・ファン・パウティスタ号」の復元船が係留された宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン・パーク）は石巻市にある。聞けば船をとりまくドッグ棟展示室は津波により壊滅したが、復元船は一部破損ですんだという。

「あしがき」を「慶長遣欧使節団」出帆4百周年を3年後にひかえて」と結ぶ本が昨年9月に刊行された。『伊達政宗の密使：慶長遣欧使節団の隠された使命』（洋泉社、歴史新書y）がそれだ。著者は大泉光一氏。氏は危機管理の専門家で知られるが、また慶長遣欧使節の研究者でもある。氏にとって慶長遣欧使節団研究はライフワーク以外のなにものでもなく、ご子息の一人に常長と命名するほどのいれこみようである。

大泉氏はこれまで次のような関係書を刊行している。『支倉六右衛門常長－慶長遣欧使節を巡る学際的研究－』（文眞堂、1998年）、『支

倉常長－慶長遣欧使節の悲劇－』（中公新書、1999年）、『支倉常長：慶長遣欧使節の真相－肖像画に秘められた実像－』（雄山閣、2005年）、『捏造された慶長遣欧使節記－間違いだらけの「支倉常長」論考－』（雄山閣、2008年）、『支倉六右衛門常長「慶長遣欧使節」研究史料集成：第I巻』（雄山閣、2010年）

南蛮時代といえば、天正遣欧使節と慶長遣欧使節がともに快挙として今に語り継がれているが、天正遣欧使節の帰国は栄光に包まれていたのに比べて、慶長遣欧使節は失意のまま帰国した。時代の趨勢がキリシタン禁制に向かうなかで、栄光のはずの旅は悲劇に終わったのである。

2005年6月、仙台博物館内で開催されたシンポジウムに参加のために仙台を訪れた際、元館長の案内で館内を見学した。慶長遣欧使節の研究者は数多い。そこで、元館長にもっとも高く評価している研究者は誰かと質問を投げかけたところ、『支倉常長』（吉川弘文館、2003年）の著者、五野井隆史氏の名を即座に挙げられ、大泉光一氏への言及は何もなかった。

使節の目的は、世の常識から言えば、日本最初の通商外交の展開であるが、大泉氏は長年の研究成果の結果、ついに使節の真の目的の核心に触れることになった。氏によれば、当時まだ政治・軍事的にも不安定だった江戸幕府の転覆を狙っていた政宗は、ソテロと支倉にある密命を託していたというのだ。ではその密命とは何かというと、日本に「キリシタン帝国」を築くことであり、そうすることでスペインから軍事支援を受けて倒幕し、あわよくば将軍となって、ローマ教皇に服従と忠誠を誓って配下になることであったというのだ。このようなきわめて大胆な大泉氏説に対して、日本の歴史家は今後どのように評価を下すのか興味津々ではあるが、今は、東北が見事に復活して、2年後に4百周年記念祭が盛大に開催されることを祈りたい。サン・ファン・パウティスタ号は東北復興のシンボルだと言われている。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）